研究ノート

ギリシア語旧約聖書における *παιδεία* について

—聖書における形成の研究(1)—

伊藤利行

聖書において「形成」ということは如何なる広がりと深さを持っているだろうか。ここで「形成」というのは、最も広義の意味でのそれであって、何らかの「形」が「成」るという事態のことである。そのような意味で「形成」という事を考える場合、様々な思想的局面が考えられる。ここでは、ヘクサプラを含むギリシア語旧約聖書における *παιδεία* とその関連語について考察してみたい。(1)

(一) 用語分析

七十人訳聖書の正典部分に現われる *παιδεία* とその関連語は、*παιδεία, παιδεύειν, ἐκπαιδεύειν,* (2) *καταπαιδεύειν, παιδευτής, ἀπαιδευσία, ἀπαίδευτος* の七語である。(3) 基本的には、これらはすべてヘブライ語と対応可能である。それを一覧表にすると、表A、Bのようになる。表AのIIIaはマソラ本文はあるが、ギリシア語との対応に種々の問題があるもの、IIIbは、対応するマソラ本文が無いもの、IIIcは、マソラ本文はあるが、対応語はなく、ギリシア語本文の意味を明確にするための附加語である。(4)

ヘブライ語との対応の点から見ると、mūsar, jsr, rdh の頻度が著しい。これら三語が旧約聖書中に占めるそれぞれの比率は、mūsar(AT 50)は47 (*παιδεία* 44, *παιδεύειν* 2, *παιδευτής* 1)で94%、(5) jsr(AT 42)は39 (*παιδεύειν*)で93%、(6) rdh(AT 23)は11 (*παιδεύειν* 10, *παιδευτής* 1, *καταπαιδεύειν* 1, 重復一回)で48%となる。更に mūsar は jsr の派生語であるから、jsr 根の表A中の比率は、(Hi 33:16 の mōsār を加え、Hos 5:2 の mūsar と III b, c を除くと)、86/133で65%となる。

次に、表Aについて聖句の所在個所 (jsr 根の回数／全回数)を整理すると、Spr (34/45), Ps(9/20), Jer (15/15), Jes (3/10), Lev (3/7), Dtn (6/7), 2 Chr (2/6), Hi (4/6), Ez(2/5), Hos(2/5), 1 Kön(4/4), Zeph (2/2), 他九書(各 0/1)となる。従って、知恵文学に属するものが、38/51、預言書文学に属するものが24/39、詩篇が 9/20、他が 15/31で、全体に対するそれぞれの比率は、36%、28%、14%、22%となり、それぞれの内で jsr 根の占める比率は、75%、62%、45%、48%となる。

また、rdh がすべて七十人訳以外の訳に存在するという事実は、このような理解の仕方は後代の発展であるという事を示唆するものと解される。

以上の分析から、*παιδεία, παιδεύειν* は主に jsr 根の語と対応

表 A	παιδεία	I	mūsar:Dtn 11:2; Hi 5:17(A); 20:3(G,Θ); 36:10(A,Σ,Θ); Ps 49:17; Spr 1:2,3(A,Σ), 7,8; 3:11; 4:1,13; 5:12,23(Θ); 6:23(G,A,Σ,Θ); 8:10(G,A,Σ),33; 10:17(G,Σ,Θ); 12: 1; 13:18(G,Σ),24(Aλ); 15:5,10(G,Aλ),32,33; 16:22; 19:20(G,Σ),27; 22:15; 23:12, 23(Θ); 24:32; Jes 26:16; 53:5; Jer 2:30; 5:3; 7:28; 10:8(A,Σ); 17:23; 37:14(G, A,Σ,Θ); 39:33; 42:13; Ez 5:15(A,Θ); Zeph 3:2,7.
		II	2Esr 7:26(š^{e}rši); Hi 33:16(A/mōsār); 37:13(G,Θ/šēbheṭ); Ps 118:66(ṭa^{c}am); Spr 1:29(da'ath); 10:17(tōkhaḥath); 25:1(māšāl); Jes 9:5(Σ),6(Σ,Θ/miśrā); 29:24(Θ/ leqaḥ); 50:4(limmudh); Ez 13:9(sōdh); Dan 1:20(bīnā); Am 3:7(sōdh).
		III	a. Ps 2:12; 17:36 bis; Spr 17:8; 30:8; Jes 26:16(s.I); Hab 1:12. b. Hi 40:5(Σ); Spr 16:17. c. Jes 50:5.
	παιδεύειν	I	a.jsr: qal Ps 93:10; Spr 9:7; Hos 10:10α(G,A,Σ). nif Lev 26:23; Ps 2:10; Spr 29:19; Jer 6:8; 38:18β. pi Lev 26:18,28; Dtn 4:36; 8:5 bis; 21:18; 22:18; 1Kön 12:11 bis,14 bis; 2Chr 10:11β,14α; Ps 6:2; 15:7; 37:2; 38:12; 93:12; 117:18 bis; Spr 19:18; 29:17; 31:1; Jes 28:26(G,Σ); Jer 2:19; 10:24; 26:28(G,Σ); 37:11(Σ,Θ); 38:18α. hif Hos 7:12. nitp Ez 23:48. b.mūsar: Spr 13:24; 23:13. c.rdh: qal Gen 1:28(Θ); Lev 25:43(Aλ),46(Aλ),53(Aλι); 26:17(Aλι,Θ); 2Chr 8:10(Aλ); Ps 67:28(E); 109:2(Σ); Ez 34:4(Aλ). hif Jes 41:2(Θ).

		II	Dtn 32:10(bjn pi); 1Sam 26:10(ngp qal); 2Sam 22:48(jrd hif); 2Chr 10:11α(ʿms hif); Est 2:7(lqḥ qal +ʾōmēn?); Ps 140:5(hlm qal); Spr 3:12(jkḥ hif); 5:13(mōrē); Jes 46:3(nśʾ qal); Hos 6:3(E/jdʿ qal).
		III	a. Ps 89:10,12; 104:22; Spr 22:3; Ez 28:3; Hos 7:14; 10:10β. b. Spr 10:4a; 28:17a. c. 2Chr 10:11γ,14β.
表 B	καταπαιδεύειν		Klgl 1:13(Σ/rdh qal s.表A: παιδεύειν Ic).
	ἐκπαιδεύειν		Dan 1:5(gdl pi).
	παιδευτής		Ps 67:28(Θ/s.表A: παιδεύειν Ic); Hos 5:2(mūsar/s.表A: παιδεία I); šōṭrīm:Dtn 16:18(Σ); 1Chr 26:29(Σ); 2Chr 19:11(Σ).
	ἀπαιδευσία		Spr 5:23(Σ/ s.表A:παιδεία I); 20:1(Aλ/lēṣ); Hos 7:16(G,Θ/zaʿam).
	ἀπαίδευτος		k^{e}sīr: Spr 8:5; 15:14; 26:9(Σ); 27:20a(? s.BHS); Pred 7:6(Σ). b^{e}lijjaʿal: Ri 19:22(Σ); 1Sam 1:16(Θ). ʿwh nif: 1Sam 20:30(Σ). lēṣ: Spr 15:12. nābhāl: Spr 17:21. ʾ^{ae}wīl: Spr 24:8. ʾajin mūsar: Spr 5:23(s. ἀπαιδευσία,表A:παιδεία I). lō nikhsāf: Zeph 2:1. / Jes 26:11(?).

G=LXX, Septuaginta. A=Aquila. Σ=Symmachus. Θ=Theodotion. E=quinta. Aλ=ἄλλος. Aλι=ἄλλοι.

し、jsr 根から見たその比率は90％以上にも上るという事、又、知恵文学、預言書文学、詩篇に多いという事、更に、jsr 根は特に知恵文学に頻出するという事がわかる。従って、jsr 根に注意を払いながら考察を進めなければならないと考えられる。そこで、その考察の進め方であるが、最初に七十人訳の五書の部分を考察し、次にそれに関連した他の部分を考察するという順序を採りたい。それは、五書の部分は七十人訳の中では原文に忠実な翻訳で他の部分の翻訳に影響を与えていると考えられているからである。(7)

（二）五書における *παιδεία*

五書において *παιδεία* は、ヘブライ語との対応に従って、jsr 根のものとその他のものとに大別することができる。

a　先に後者を見ると、それは Dtn 32:10 に唯一度見られる。"*αὐτάρκησεν αὐτὸν ἐν τῇ ἐρήμῳ, ἐν δίψει καὶ μιαρὸς ἐν ἀνυδρῳ. ἐκύκλωσεν αὐτὸν καὶ ἐπαίδευσεν αὐτὸν καὶ διεφύλαξεν αὐτὸν ὡς κόραν ὀφθαλμοῦ.*" ここで *παιδεύειν* は、bjn「～に注意を払う気をつける」と対応しているが、この場合、それは *παιδεύειν* の基本的な意味「集中的ないし専門的に子供とかかわる」sich mit einem Kind intensiv oder berufsmässig beschäftigen と良く合致するといえる。(8)

b　次に前者について、まず名詞形 mūsar の現われる Dtn 11:1 f. (Vgl. Dtn 4:36) を見よう。"*Καὶ ἀγαπήσεις κύριον τὸν θεόν σου καὶ φυλάξῃ τὰ φυλάγματα αὐτοῦ καὶ τὰ δικαιώματα αὐτοῦ καὶ τὰς κρίσεις αὐτοῦ πάσας τὰς ἡμέρας. καὶ γνώσεσθε σήμερον ὅτι οὐχὶ τὰ παιδία ὑμῶν, ὅσοι οὐκ οἴδασιν οὐδὲ εἴδοσαν τὴν παιδείαν κυρίου τοῦ θεοῦ σου καὶ τὰ μεγαλεῖα αὐτοῦ καὶ τὴν χεῖρα τὴν κραταιὰν καὶ τὸν βραχίονα τὸν ὑψηλόν.*" ここでは出エジプトという大きな出来事を自ら目撃し体験した事を確認することによって、主なる神を愛し、その戒めを守り行うべきことが命じられている。ここで *παιδεία*/mūsar は「訓練」という意味をもつと考えられるが、二つの重要な事が、それについて存在する。一つは、この mūsar が *τὰ παιδία ὑμῶν* にではなく、出エジプトを「直接に」体験した人自身に対して言われている事である。即ち、mūsar とは人生における大きな直接体験と関係したものであり、しかも、その体験は持続すべきものであるという事、簡単に言えば、大きな人生体験と関係した認識であるという事である。もう一つは、そのような認識を媒介として主なる神を愛し、その戒めを守るという事が保たれるという事である。それゆえ、"*καὶ γνώσῃ τῇ καρδίᾳ σου ὅτι ὡς εἴ τις παιδεύσαι ἄνθρωπος τὸν υἱὸν αὐτοῦ, οὕτως κύριος ὁ θεός σου παιδεύσει σε*" (Dtn 8:5)." と言われるのである。

c　では、もし神と人の関係が断絶している場合には、jsr は一体どのような内容を持つことになるのだろうか。Lev 26:18, 23, 28 はその事を教えている。"*καὶ ἐὰν ἔως τούτου μὴ*

ὑπακούσητέ μου, καὶ προσθήσω τοῦ παιδεῦσαι ὑμᾶς ἑπτάκις ἐπὶ ταῖς ἁμαρτίαις ὑμῶν (v. 18).” ここでは παιδεύειν/jsr は「懲らしめる、罰する」という意味になる。神に「聞き従わず μὴ ὑπακούσητέ μου (v. 18)」、「逆らって歩む πορευήσεσθε πρός με πλάγιον (v. 23)」ならば、“καὶ αὐτὸς πορεύσομαι μεθ’ ὑμῶν ἐν θυμῷ πλαγίῳ καὶ παιδεύσω ὑμᾶς ἐγὼ ἑπτάκις κατὰ τὰς ἁμαρτίας ὑμῶν (v. 28).” と神御自身が言われることになる。以上のレビ記の言葉から、神が人を懲らされる場合、それは神が人との関係を断つために為される業ではなく、むしろ逆に、回復するために為される業である事を確認しなければならない。この事を申命記の言葉と比較すると、申命記では神の jsr ないし mūsar を受ける者は、οὐχὶ τὰ παιδία ὑμῶν とあったが、レビ記では、神聖法典結尾の勧告として、神の jsr はイスラエルの子孫にまでも及ぶと考えられている事が注目される。mūsar が人生における大きな直接体験と関係した認識であるという事を思い出すならば、この事実は、神が人を懲らされるのは、正に懲らしめを受ける人間に出エジプトの出来事に匹敵する「直接体験」を与えるためであり、更に、それを媒介として人が神に立ち帰り、神と人との関係が回復されるために為されるものであるという事を示唆していると考えられる。要するに、神と人の関係が断絶している場合には、神の jsr は懲らしめとして過去のイスラエル人の直接体験を「現在化」するという機能を果たすのである。

このような jsr の機能は人間相互の関係においても確認される (Vgl. Dtn 8:5)。Dtn 21:18 がそれである。“Ἐὰν δὲ τινι ᾖ υἱὸς ἀπειθὴς καὶ ἐρεθιστὴς οὐκ ὑπακούων φωνῆν πατρὸς καὶ φωνῆν μητρὸς καὶ παιδεύσωσιν αὐτὸν καὶ μὴ εἰσακούῃ αὐτῶν.” ここで父母の φωνή というのは父母がその人生体験を通じて直接に得た教訓であり、いわば出エジプトの体験に等しき直接体験に相当する。それに基づく躾に「聞き従わない οὐκ ὑπακούων」子供には jsr「懲らしめ」が加えられ、それでもなお父母の言葉を「聞き入れない μὴ εἰσακούῃ αὐτῶν」なら、最後には、“καὶ λεθοβολήσουσιν αὐτὸν οἱ ἄνδρες τῆς πόλεως αὐτοῦ ἐν λίθοις, καὶ ἀποθανεῖται (Dtn 21:21a).” ということになる。それだけではない。更に、このような出来事は、それを「聞」いた他の人間に恐れを与え (καὶ ἐξαρεῖς τὸν πονηρὸν ἐξ ὑμῶν αὐτῶν, καὶ οἱ ἐπίλοιποι ἀκούσαντες φοβηθήσονται. Dtn 21:21b)、その事によって、自ら直接参与した出来事ではないにもかかわらず、彼らの内ではその出来事が「直接体験に等しきもの」として機能し、「警告」、「戒め」となると考えられる。

人間の不埒な行動にも jsr「罰」が加えられる。“καὶ λήμψεται ἡ γεροντία τῆς πόλεως ἐκείνης τὸν ἄνθρωπον ἐκεῖνον καὶ παιδεύσουσιν αὐτόν (Dtn22:18).”

以上の考察によって、jsr の意味は、如何なる人格関係の下

にこの語が用いられるかによって変動し、一義的に定義できないものである事がわかる。Gesenius-Buhl, Brown-Driver-Briggs, Koehler-Baumgartner² 三辞典を見ても、その意味区分には多少のズレがある。しかし、jsr の基本的意味は、以上の考察によって明らかであると思うので、次の五書以外の *παιδεία* の考察では、すでに考察し得た類のものについては可能な限り簡潔に叙述し、それ以外のものの考察に重点を絞ることにしよう。

(三) 五書以外における *παιδεία*

a　最初に「養育」に類するものを見てみよう。Dan 1:5 では *ἐκπαιδεύειν* がネブカデネザル王がダニエルら若者を「養育した gdl」という意味を表わしている。Est 2:7 の七十人訳はマソラ本文とは多少異なっており、原文が多少異なっていたか、意訳の程度が強いものと考えられるが、モルデカイが「後見人 'ōmēn」としてエステルを娘として「引き取る lqḥ」という意味を表わしている。Jes 46:3 では、神がイスラエル人のことを子供の時から「運ばれた者 hannᵉśūʾīm (神が手で抱えて子供をあやされたという意味であろう)」と呼んでおられる。「養育」が「こまやかな配慮」を持つものである事を考える時、次の二個所も、広い意味で、ここに属するといえよう。Ez 13:9 では偽預言者に対して "*ἐν παιδείᾳ τοῦ λαοῦ οὐκ ἔσονται*" と言われている。この *παιδεία* は、「親しき者の交わり、親密な相談 sōdh」と対応しており、更に、それは Am 3:7 では「秘密」という意味にもなると考えられる (*διότι οὐ μὴ ποιήσῃ κύριος ὁ θεὸς πράγμα, ἐὰν μὴ ἀποκαλύψῃ παιδείαν αὐτοῦ πρὸς τοὺς δούλους αὐτοῦ τοὺς προφήτας.*)。しかし、どちらも人と人、神と人との「親密さ」を表わしており、それが養育のもつ「こまやかな配慮」と相通ずるものを持つと思われる。

b　次に「訓練」に類するものを見てみよう。この意味に属する言葉の多くは、箴言の言葉である。「箴言 māšāl」という語自体が、*παιδεία* と訳された例もある (Spr 25:1 B 写本。シナイ写本、A 写本、Σ、E は、*παροιμία*。A、Θ は、*παραβολή*)。この māšāl は、Spr 1:2 (vgl. 1:3) で、"*γνῶναι σοφίαν καὶ παιδείαν νοῆσαί τε λόγους φρονήσεως*" が目的だと言われている。(9) 「教訓 *παιδεία*/mūsar」が神との関係で言われる時には、「神を恐れること、敬神」が最初の最も重要な教訓であると言われている (Spr 1:7; 15:33)。人との関係で言われる時には、父の「教、訓戒」という場合 (Spr 1:8; 4:1; 19:27) と自分で発見する「教訓」という場合がある (Spr 24:32) が、何れの場合も教訓を軽んずることなく受けることが勧められている (Spr 4:13; 8:10, 33; 19:20; 23:12, 23)。「教訓がないこと *μὴ εἶναι παιδείαν* (Θ)」によって人間は死に至る (Spr 5:23. LXX: *ἀναιδευτος*, Σ: *ἀπαιδευσία*)。

「戒め」という意味もこの類に属すると言える。神に関して

は以下の言葉がある。メシアの来臨に際して王たちは「戒め」を受けるように勧告される (Ps 2:10)。愚か者は偶像のむなしい「戒め」を大切にする (Jer 10:8)。悪者は神の「戒め」を憎み捨てる (Ps 49:17)。また、神は恐ろしい警告によって人を高ぶりから離れさせようとされる (Hi 33:16)。また人々が悩む時に彼らの高ぶりを示して彼らの耳を開き、「戒め」て悪から離れるように命じられる (Hi 36:10)。人に関しては以下の言葉がある。母が子を「戒め」教える (Spr 31:1)。しかし、自分が悟りのある人間だと思っている人間にとっては、「戒め」は「非難」として受けとられる (Hi 20:3)。僕の訓練、戒めは言葉だけではできない (Spr 29:19)。以上すべて jsr 根の語と対応している。

「教」もまた、この類に属すると言える。神は農夫を教え正しい判断が出来るようにされる (jsr: Jes 28:26)。また主は語るべき時に語る言葉を知った「弟子 limmudh」の舌を与えられる (Jes 50:4)。神の命令を信じる者は、正しい「判断 ṭa'am」ができるように神に教えを願う (Ps 118:66)。愚か者は「知識 παιδεία/da'ath」を憎み、主を恐れることを選ばない (Spr 1:29 A写本。B写本は σοφία)。しかし、イスラエルの内の呟く者もいつか「教 leqaḥ」を学ぶ (Jes 29:24)。「教師 mōrē」(Spr 5:13) やダニエルの「悟り bīnā」(Dan 1:20) という語も見られる。

c 次に「懲らしめ」に類するものを見てみよう。まず神について見ると、神は "ἐγὼ δὲ παιτευτὴς ὑμῶν" (Hos 5:12)。" (マソラ本文では、"ὑμῶν" ではなく「彼ら」) と語り、「教育者」としてイスラエルに臨み、これを懲められる (Jer 26:28; 37:11, 14; Hos 7:12; 10:10)。主がサウルを「撃たれる ngp」(1 Sam 26:10) ということもこれに属する。神はイスラエルに「戒め、懲らしめを受け入れる」ように言われる (Jer 6:8; Zebh 3:7) が、イスラエルは「戒め、懲らしめ、教」を受け入れない (Jer 2:30; 5:3; 7:28; 17:23; 39:33; 42:13; Zeph 3:2)。しかし、最後には懲らしめ受け入れ神に帰ろうとする。"ἀκοῇ ἤκουσα Ἐφραιμ ὀδυρομένου Ἐπαίδευσάς με, καὶ ἐπαιδεύθην ἐγὼ ὡσεὶ μόσχος οὐκ ἐδιδάχθην. ἐπίστρεψόν με, καὶ ἐπιστρέψω, ὅτι σὺ κύριος ὁ θεός μου (Jer 38:18)." そして、神に罰せられた者は自ら戒めるようになる (Ez 23:48)。人について見ると、自分の子供を愛する者は、子供を懲らしめることが子供にとっても親にとっても安らぎと喜びを与えることになるという理由で、子供を懲らしめ、むち打つように勧められている (Spr 13:24; 22:15; 23:13; 29:17)。しかし、懲らしめる時に殺す気を起こすなと注意されている (Spr 19:18)。それは、主が人を懲らしめられる時と同じである。"παιδεύων ἐπαίδευσεν με ὁ κύριος καὶ τῷ θανάτῳ οὐ παρέδωκέν με (Ps 117:18)." 「むち打つ」ということが言われているが、「むち šebhet」という語自体が παιδεία

(＝*καὶ παιδεύειν* と Field は考えている)や rdh と対応していて、Klgl 1:13 で、主が火を人の骨の中に送って懲らしめられるという事を語っている。

次に、jsr が jkḥ と共に現われる一連の言葉について見てみよう。[11] まず、Ps 6:2＝37:2 (vgl. Spr 5:12; 9:7; 15:10) では、"*Κύριε, μὴ τῷ θυμῷ σου ἐλέγξῃς με μηδὲ τῇ ὀργῇ σου παιδεύσῃς με.*" とあり、両者は同意語である。Spr 12:1 (vgl. Spr 13:18; 15:32) では、"*ὁ ἀγαπῶν παιδείαν ἀγαπᾷ αἴσθησιν, ὁ δὲ μισῶν ἐλέγχους ἄφρων.*" とあり、「訓戒 *παιδεία*/mūsar」を受け入れる者と「叱責 *ἔλεγχος*/tōkhaḥath」を受け入れない者との明瞭の対比を示している。その場合に tōkhaḥath が *ἔλεγχος* ではなく *παιδεία* (Spr 10:17) や *ἐντολή* (Spr 15:5) と訳されていることもある。次の二つの言葉は、*παιδεία* と *ἔλεγχος* の関係を明確にしている。Ps 93:10 (*ὁ παιδεύων ἔθνη οὐχὶ ἐλέγξει, ὁ διδάσκων ἄνθρωπον γνῶσιν*;) では *ὁ παιδεύων ἔθνη*＝*ὁ διδάσκων ἄνθρωπον γνῶσιν* であり、その *ὁ παιδεύων* が *ἐλέγχειν* すると言っているのだから、*ἐλέγχειν* は神の *παιδεία* の業の一つである。また、Spr 6:23 では七十人訳は、"*ὅτι λύχνος ἐντολὴ νόμου καὶ φῶς, καὶ ὁδὸς ζωῆς ἔλεγχος καὶ παιδεία.*" となっていて明確ではないが、A・Σ・Θ はすべて *ἐλέγχοι παιδείας* となっていて、*ἔλεγχος* が *παιδεία* に属するものである事を示している。従って、*παιδεία* は *ἔλεγχος* を包摂し、*ἔλεγχος* は *παιδεία* の中の厳

という語で表わされていることがある (Hi 37:13)。また、神からも人からも懲らしめられないとも、愚か者にとっては、愚かな事を考える事が懲らしめになる。(Spr 16:22)「追放 šᵉrūṯ」が懲らしめと解釈され *παιδεία* と言われる場合もある (2 Esr 7:26)。レハベアムが民の願いを斥ける時、彼の父が民を懲らしめた ('ms「荷を負わせる」2Chr 10:11*a*) 以上に、彼は民を懲らしめる jsr と言っている (1 Kön 12:11 bis, 14 bis; 2 Chr 10:11*β*, 14*β*)。

このような民を懲らしめるという意味の系統の中に 2 Sam 22:48 も属すると言えよう。"*ἰσχυρὸς κύριος ὁ διδοὺς ἐκδικήσεις ἐμοί, παιδεύων λαοὺς ὑποκάτω μου.*" ここで *παιδεύειν* は jrd「(下に)置く」と対応しているが、恐らくこの訳し方の影響の下に一連の rdh の理解が可能となるであろう。[10] rdh「支配する、治める」は次のように用いられている。人間が生物を (Gen 1:28)、メシア (Ps 109:2) やソロモンの役人 (2 Chr 8:10) がイスラエルの民を「治める」。若いベニヤミン人が民を「指導する」(Ps 67:28)。イスラエルの憎む者がイスラエルを、又、東の王（クロス王？）が王たちを「踏みにじる」(Lev 26:17; Jes 41:2)。イスラエルは同朋の兄弟を「酷使」してはならない (Lev 25:43, 46, 53)。しかし、イスラエルの牧者は選ばれた者を「力ずくで治めた」(Ez 34:4)。メシアの「主権・支配 miśrā」(Jes 9:5f.) も、更に、この系統に入れてよいであろう。*καταπαιδεύειν*

しい懲らしめ、叱責等の局面のみを表わしていると考えられる。それゆえ懲らしめとしての *παιδεία* が *ἔλεγχος* によって示される時には、その懲らしめ方は尋常のものではなく、それを被ったイスラエルは、他の国々にとって驚き、「戒め mūsar」となる程である (Ez 5 : 15)。また、人はそれを被ることを吐き気を覚える程に嫌らうが、主はそのようにして、彼が受け入れ愛する者を戒められるのであると、Spr 3 : 11f. は語っている。[12] "Υἱέ, μὴ ὀλιγώρει παιδείας κυρίου μηδὲ ἐκλύου ὑπ' αὐτοῦ ἐλεγχόμενος· ὃν γὰρ ἀγαπᾷ κύριος παιδεύει, μαστιγοῖ δὲ πάντα υἱὸν ὃν παραδέχεται. (*παιδεύει* はB写本では *ἐλέγχει*)" 更に、そのような懲らしめ方の厳しさは、その懲らしめの対象と質の両面で集中的徹底的な深まりを示す。即ち、その対象は個人、その質は罪に対する懲らしめが語られるのである。次の二つは、それを示す。"ἐν ἐλεγμοῖς ὑπὲρ ἀνομίας ἐπαίδευσας ἄνθρωπον καὶ ἐξέστησας ὡς ἀράχνην τὴν ψυχὴν αὐτοῦ· πλὴν μάτην ταράσσεται πᾶς ἄνθρωπος (Ps 38 : 12)." ここでは人を懲らしめ責められるのは神であるが、Jer 2 : 19 では、人の為す背信や悪そのものが人を懲らしめ責める。"παιδεύσει σε ἡ ἀποστασία σου, καὶ ἡ κακία σου ἐλέγξει σε. καὶ γνῶθι καὶ ἴδε ὅτι πικρόν σοι τὸ καταλιπεῖν σε ἐμέ, λέγει κύριος ὁ θεός σου· καὶ οὐκ εὐδόκησα ἐπὶ σοί, λέγει κύριος ὁ θεός σου."

人間の罪自体が人間を責めるという意識、このような深い意識は、一体、人間のどこで生ずるのだろうか。それは人間の深奥、最も秘密に満ちた部分、「腎臓 kelājōth/*νεφροί*」において生ずるのである。Ps 15 : 7 は次のように教えている。"*εὐλογήσω τὸν κύριον τὸν συνετίσαντά με· ἔτι δὲ καὶ ἕως νυκτὸς ἐπαίδευσάν με οἱ νεφροί μου.*" 夜になる。すると人間の内の最も密やかな部分が語り出す。その語りかけに人間は耳をすまし、自己を深く自覚する。この語りかけは真昼に公になされた讃美のようなものではない。讃美の声が公然と至高の天に向かって上昇するのに対して、真夜中に最も密かになされる「腎臓」の語りかけは、人の心の最も深い密やかな所へと沈潜し、その思いを自己自身に対して顕にする。しかし、真昼の讃美と真夜中の語りかけの双方に共通する事がある。それは、自己が忠告を受けるべき人間であること、教え戒められるべき人間であることの自覚である。この自覚は、人間の腎臓において生ずる。そして、このような深き自覚に到達した人間は、神への讃美に向かうのである。神の御言葉を受け入れ自己を深く自覚し、公に神を讃美することに向う人間の、この受動から能動への大きな方向転換の場となるのは、人間の深奥たる「腎臓」である。[13]

ここにおいて我々は、考察の大きな転換点に立つ。自ら懲らしめを求めるという事態が生ずるのである。そこには、自己の罪を自覚する人間にして初めて神を讃美しうるという精神と共鳴するものがある (vgl. Jer 38 : 18)。Ps 140 : 5 (*παιδεύσει με*

δίκαιος ἐν ἐλέει καὶ ἐλέγξει με) では *παιδεύειν* は hlm「打つ」と対応している。また、ここでは jkḥ/*ἐλέγχειν* が用いられている。Jer 10 : 23f. はっきりと明白である。"*οἶδα, κύριε, ὅτι οὐχὶ τοῦ ἀνθρώπου ἡ ὁδὸς αὐτοῦ, οὐδὲ ἀνὴρ πορεύσεται καὶ κατορθώσει πορείαν αὐτοῦ. παίδευσον ἡμᾶς, κύριε, πλὴν ἐν κρίσει καὶ μὴ ἐν θυμῷ, ἵνα μὴ ὀλίγους ἡμᾶς ποιήσῃς.*" 神が人間の歴史の中に介入すること (eingreifen) がなければ、人間は無に帰するというこの言葉は、歴史の主は神であり、神の歴史への介入 (Eingriff)、神の *παιδεία* は、神の愛の現われであるという歴史意識を表明している。そこで神に戒められる者は幸いだと言われるようになる。Hi 5 : 17 : "*μακάριος δὲ ἄνθρωπος, ὃν ἤλεγξεν ὁ κύριος· νουθέτημα δὲ παντοκράτορος μὴ ἀπαναίνου* (LXX : *νουθέτημα, A* : *παιδείαν*)." Ps 93 : 12f. は、より積極的かつ明白に、神に戒められる者は災いの日にそなえ守全で安きを得ると語っている。"*μακάριος ἄνθρωπος, ὃν ἂν σὺ παιδεύσῃς, κύριε, καὶ ἐκ τοῦ νόμου σου διδάξῃς αὐτὸν τοῦ πραῦναι αὐτῷ ἀφ' ἡμερῶν πονηρῶν.*" 更に、ここに Hos 6 : 3 (E) の *παιδευσῶμεν* を加えてもよいであろう。これは、jd'「知る」と対応しており、ヘブライ語に忠実に訳せば七十人訳のように *γνωσόμεθα* としたほうがよい。しかし、このホセア書の個所の1節から3節の文脈 (LXX: *Πορευθῶμεν καὶ ἐπιστρέψωμεν πρὸς κύριον τὸν θεὸν ἡμων, ὅτι αὐτὸς ἥρπακεν καὶ ἰάσεται ἡμᾶς, πατάξει καὶ μοτώσει ἡμᾶς· ὑγιάσει ἡμᾶς μετὰ δύο ἡμέρας, ἐν τῇ ἡμέρᾳ τῇ τρίτῃ ἀναστησόμεθα καὶ ζησόμεθα ἐνώπιον αὐτοῦ· καὶ γνωωσόμεθα διώξομεν τοῦ γνῶναι τὸν κύριον, ὡς ὄρθρον ἕτοιμον εὑρήσομεν αὐτόν, καὶ ἥξει ὡς ὑετὸς ἡμῖν πρόιμος καὶ ὄψιμος τῇ γῇ.*) は、自己の罪を自覚したイスラエルが、神に帰ろうとして神の「赦し」と「回復」の確信を告白する部分であり、おそらくEの訳者は、この場合の「知ろう」という言葉の中に自らの反逆に対する深い後悔と痛みを感じて真に主に立ち帰ろうとする精神を見て取ったのであろう。それに加えて、すでに彼以前の訳で、「懲らしめる」という意味を *παιδεύειν* が持っていることを知っていたので、「知ろう」という言葉の中に、主を知ろうとすると同時に自己の罪を認識しようとする二重の気持ちを込めて最終的に *παιδευσῶμεν* と訳したのであろうと考えられる。

以上、自ら懲らしめを求める場合の言葉を考察して来たが、これら一連の言葉の最後として、否、それ以上の言葉、*παιδεία* 全体の最後の言葉として Jes 53 : 5 を見ることにしよう。"*αὐτὸς δὲ ἐτραυματίσθη διὰ τὰς ἀνομίας ἡμων καὶ μεμαλάκισται διὰ τὰς ἁμαρτίας ἡμῶν· παιδεία εἰρήνης ἡμῶν ἐπ' αὐτόν, τῷ μώλωπι αὐτοῦ ἡμεῖς ἰάθημεν.*" ここでは、懲らしめを受ける者は、自らの罪のゆえではなく、また自らの平安のためでもない。完全に他者の罪のため、他者に平安をもたらすために懲らしめを受けるのである。そして、この他者のために懲らしめを受ける者の前で、彼を見つめ自己の罪を自覚し告白する者たちは、「私たち」と

いう、一つの連帯した集団、一つの民として形成されている。これ以前の「形成 *παιδεία*」が、すべて詰まるところは自己に向けてなされており、「自己形成」と言えるのに対して、これは、完全に他者に向けてなされており、真の意味で「他者形成」と呼ぶにふさわしい。ここにおいて *παιδεία* は、その頂点に達したのである。

（四）結　論

以上の考察によって、ギリシア語旧約聖書の *παιδεία* は、jsr 根以外の語との対応関係では目立った特色はなく、むしろ逆に、jsr 根の語がそれ以外の語との対応関係にも大きな影響を及ぼしている事がわかる。Bertram は、この *παιδεία* と jsr 根の語との対応の事実を取り上げて、一方では、このギリシア語が「訓練」や「懲らしめ」という、それ自身にとって本来異質な意味を持つようになり、他方では旧約聖書の本文の中に、ヘブライ語本文に本来あった以上に知的要素が入り込むようになったと語っている。[14] 本稿は、この言葉の前半部を扱ったが、ギリシア語そのものには重心を置かなかったので「異質」というところまでは論究できなかった。しかし、どのような思想が *παιδεία* と考えられたかについては、一応明らかにした。それをここでは論理形態と歴史意識の二面からまとめ結論としたい。それはヘブライ思想において「形成」とは何かという問題にとって基本的な事柄であると考える。

論理形態から見ると、ヘブライ思想において *παιδεία*「形成」は、本質的に「回復 Wiederherstellung」、「再生 Wiedergeburt」など「Wieder 再び」という契機を持つ。現存在がそのままの姿で陶冶され形成されるというのではなく、一旦、その現存在が否定されて「再び」存在を回復する時、正にその時に真の意味でヘブライ的「形成」が成立する。「形成」を「形」が「成」ると考えた場合、それはより明瞭になる。否定される前と後の「形」は何らかの意味で同一であり、その意味で「再び」である。問題は「否定」とは何かという事と「否定」前後を結ぶ「要」は何かという事である。この問題の答は、歴史意識の面から与えられる。

歴史意識から見ると、ヘブライ思想における「形成」は、人間の歴史の中への神の「介入 Eingriff」という意識に貫かれている。それは自らの苦悩せる現在を、過去の出エジプトの出来事を現在化して、出エジプトの出来事のように神からのもの（神の介入）であると受けとめ、神に立ち帰ろうとする歴史意識であり深い信仰である。このような歴史意識を支えるのは、自己の罪を自覚する受動的人間から悔い改めて神に立ち帰る能動的人間への転換が起こる「腎臓」――今、これを「良心」と呼ぶことにするなら――、「良心」である。論理形態における「否定」とは、それゆえ、「神の介入」であり、「否定前後の要」とは「良心」である。そして、自らの苦難の歴史をそのよ

らに受けとめ得た深い歴史意識が最終的に到達したのは、Jes 53:5 に示される「他者形成」の思想である。他者のために懲らしめを受ける者は、人々にとって「神の介入」であり、人々は自らの罪を告白し、神の前に立ち帰り、一つの民「私たち」となる。ここにおいてイスライ的「形成」は最高峰に達したのである。

註

(1) 本稿では、正典部分のみを扱い、外典部分は省略した。用いたテキストは、LXX: A. Rahlfs (Hrsg.), Septuaginta, Stuttgart, 1935. Hexapla: F. Field (Hrsg.), Origenis Hexaplorum quae supersunt, Nachdruck. Hildesheim, 1964. AT: K. Elliger et W. Rudolph (Hrsg.), Biblia Hebraica Stuttgartensia, Stuttgart, 1977. である。又、聖書の各書・各訳の表示は、原則として略号を用い、聖句の章節表示は、すべて七十人訳のものを用いた。マソラ本文と異なるものは以下の通り。Ps 15 (LXX)=16 (M) の類、Ps 17, 37, 38, 49, 67, 89, 93, 104, 109, 117, 140. Jer 26 (LXX)=46 (M) の類、Jer 37, 38, 39, 42=30, 31, 32, 35.

(2) X. Jacques, Index des mots apparentés dans la Septante, Roma, 1972.

(3) E. Hatch-H. A. Redpath, A Concordance to the Septuagint and the Other Greek Versions of the Old Testament, Nachdruck, Graz-Austria, 1975.

(4) III に属するものは、それぞれが多くの説明を要するので本稿では表に示した以上には言及できない。同様に表Bについても、若干のものを除いて、言及できない。

(5) 残り三回は、Hi 12:18; Spr 7:22; 13:1 である。

(6) 残り三回は、Hi 4:13; Jes 8:11; Hos 7:15 である。なお、jsr 根には他に jissōr (Hi 40:2), mōsār (Hi 33:16 s. 表A *παιδεία* II) の形がある。

(7) 最新の例として E. Tov の見解 (The Interpreter's Dictionary of the Bible, Supplementary Volume, Nashville, 1976, p. 811) がある。ただし、影響を与えていると言っても、それは、基本的な線を示すという事である。

(8) G. Bertram, ThW V, Art. *παιδεύω* (S. 596-624) Anm. 1.

(9) ここに *παιδεία*/mūsar と *σοφία*/ḥokhmā という二つの言葉が現われている。両者の違いを考える事は極めて重要であるが、それは、もっと広く知恵を表わすすべての言葉の相互関係、更に知恵の思想と歴史との関係を明らかにする過程において十分な解答を見い出すものと考える。そう考えるゆえに本稿では知恵に関する言及は断念せざるを得ない。

(10) G. Bertram, Der Begriff der Erziehung in der griechischen Bibel, in: Imago Dei, Festschr. Gustav Krüger

(1932), 33–51. は S. 49f. でヘブライ語本文の誤解によってギリシア語本文中にヘレニズム概念が持ち込まれたと思われるものがしばしばあると語っている。rdh は jrh「教える」あるいは jrd の誤解から生じたのではないかと考えている。表 A IIIa のものは、そのようなものが多い。

(11) jkḥ 根は旧約聖書中に87回現われ、jsr と同じ文脈で用いられるものが三分の一の29回、その内で同じ節に現われるものは17回ある。その内10回は名詞形 tōkhaḥath である。これら jkḥ 根は、その約8割に当たる68回が七十人訳では ἐλέγχειν とその関連語によって訳されている。jkḥ/ἐλέγχειν, tōkhaḥath/ἔλεγχος の場合が多い。

(12) この Spr 3:11f. は Hebr 12:5f. で、新約における子たる身分の証しとしての παιδεία の聖書証明として引用されている。

(13) この臀臓とは、「良心」であろう。次の事は、それを示唆すると思う。詩篇の第15篇では παιδεύειν/jsr であるが、この jsr は jkḥ と同じ意味を持つことがあり、しかも七十人訳では jkḥ = ἐλέγχειν と考えてよく、この ἐλέγχειν は後代の発展の中で συνείδησις の側面として示されることがある。他に H. W. Wolff, Anthropologie des ATs, München, 1973, S. 105. を参照。

(14) ThW V, S. 607: Damit erhaten die griechischen Vokabeln eine neue, ihnen ursprünglich fast fremde Bedeutung. παιδεία nimmt den Sinn von Zucht und Züchtigung in sich auf; anderseits aber dringt in die alttestamentlichen Texte das intellektuelle Moment von Bildung, Erziehung und Unterricht viel weiter ein, als das im Urtext der Fall war.